

先人の知恵から

38

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

「さ」行がもう終わるところまで来た。やっと三分の一くらいか？少しずつスピードアップを目指そうと思ってはいるが中々思うようには進まない。先に掲載したものと同じような内容にならないように、チェックをするのがだんだん大変になってきた。それでも最後まで何とか頑張ろう。

今回は「せ」のところから以下の9つ。

- 千鈞の弩はけい鼠の為に機を発たず
- 善言は布帛よりも暖かし
- 前事の忘れざるは後事の師なり
- 船頭多くして船山へ登る
- 先入主となる
- 善の裏は悪
- 善は急げ
- 千里の行も足下より始まる
- 善を責むるは朋友の道なり

＜千鈞の弩はけい鼠の為に機を発たず＞

大志を抱いているものは、小さな事には心を動かさないというたとえ。非常に強く強い石弓は、小さなハツカネズミを射るためには使わないの意から。弩＝石弓、けい鼠＝ハツカネズミ。 出典 三国志

三国志を好きな人は多い。徳に、父親たちに通じやすい。母親が神経質ということはまああるが、最近はお子さんの細かいところを気にする父親も増えている。大したことでもない、ちょっとした小さいことに雷を落としていたら、子どもは小さいことに気を取られて、いつもびくびくしてしまうだろう。ちょっとしたことをするにも、戸惑って、進めなくなり、もっと新しいこと、大きなことにチャレンジする気持ちが育たなくなってしまう。委縮した子に

なってしまうだろう。子どもに大きな心で伸び伸びと生きていってほしいと思うなら、いざという時のために、父親からの強い叱責は避けてほしいという意味合いでこの諺を伝えている。

<善言は布帛よりも暖かし>

良い言葉は、身に着ける衣類よりも暖かい。言葉には人の心をあたためる大きな力があることのとえ。 出典 荀子

言葉の力というのは大きい。人を傷つけることも、人を元気づけることも、人を癒すこともできる。目の前の人にとどのような言葉を掛けたらよいか、自分の子どもにとどのような声を掛けたらよいか、あまり考えすぎれば言えなくなったり、言うタイミングを逸してしまったりするだろう。

温かい言葉、優しい言葉は沢山ある。普段からそういう言葉を沢山意識して、頭の中に蓄積しておくこと、必要な時にすっと出てくるだろう。褒められるのが苦手な人が増えてきたが、照れくさはあっても、相手が本心から褒めてくれていたら、そこまで嫌な気持ちにはならないだろう。褒め言葉も、嘘くさい言葉ではなく、さりげない言葉の方が良いのかもしれないが、いずれにしても、人に温かい言葉をかけられることは、人との関係性を良くするうえでも必要だろう。それは親子の間でも同じである。かわいい服や、素敵な文房具を買ってあげるよりも、優しい、暖かい言葉の方が、子どもの心をほっこりさせるものだ。そんな意味を伝えたくて、この諺を紹介している。

子どもに対し、「有難う」とか「助かった

よ」とか、「大好きだよ」「かわいいね」「すごいね」「頑張ったね」「上手だね」「良くできたね」など、暖かい言葉をもっともっと使ってほしい。

<前事の忘れざるは後事の師なり>

前にあったことを忘れないで心の止めておけば、その経験は今後事に当たるときの良い戒めや手本になるということ。

失敗は誰にでもある。まして、子どもたちはいっぱい失敗するし、失敗したほうが良い。ただ、失敗してもそれを無かったことにしては、また同じことを繰り返してしまう。大人でもそれは同じである。また、成功することも多々ある。

一度やったことが、失敗であれ、成功であれなぜ失敗したのか、どうしたからうまくいったのかと考えることで、後々の自分の行動を助けることになる。失敗したことや成功したことを忘れずに、後々の手本としたり戒めとしたりすることが、人間を成長させる。

母親の子育てというのは、失敗の連続だと思う。子どもたちの行動も失敗の連続だったりする。そのことで気落ちしている母や子に対し、「失敗は成功の基」と同様にこの諺を使うこともあるし、「成功したから良い」のではなく、なぜうまくいったのか、なぜ成功したのかを一緒に考えることで、これからの過ごし方のヒントやモデルになるのだという意味でこの諺を使うこともある。

生きている以上、いろいろなことに出会う。失敗も成功も、自分の人生の糧にでき

ますように！

<船頭多くして船山へ登る>

指図するものが多くて統一が取れず、物事がうまく運ばなかったり、見当違いの方に進んでしまうことのため。一艘の船に船頭が何人もいると船が山に登っていくような、考えてもみなかったおかしなことになるの意から。

これは良く知られているので、説明するまでもないかもしれないが、子どもが少なくなった影響もあってか、一人の子どもに対し、父母、祖父母、親戚のおじさんおばさん、いとこ、塾の先生、学校の先生、そしてカウンセラーなど、いろいろな人が関わるようになった。その結果、いろいろな人がまちまちなことを言ってきて、子どもが混乱したり、母親が混乱したりということが起こる。そんな時にこの諺を出す。

そして、子どもにも母親にも、相談もほどほどにして、自分がどうしたいかをしっかり見つめなおして考え、主張するようにと伝えている。

英語では・・・

Many dressers put bride's dress out of order. (着付け係が大勢いると、花嫁の衣装が場違いのものになってしまう。)

<先入主となる>

固定観念がつくられてしまうと、中々破りにくいということ。先に聞いたり学んだりしたことが頭にこびりついて、他の考えを受け入れず、自由な思考ができにくくなること。先入が主となり、あとから入った

ことは従となるの意から。この言葉から「先入観」「先入主」という語ができた。

出典 かんじよ 漢書

相談支援の場にいると、先入観や固定観念が、支援策を考える上での邪魔になるということを度々経験する。「この人は〇〇だ」「この家は××だ」と良く知っている人に限って決め打ちをしてくる。その人のとらえ方が凝り固まっていることに、気づいていないのである。

他の人が関わってみたら、〇〇でも××でもないということは多い。凝り固まった考え方が、支援を難しくしているのである。いろいろな角度で見て、考えてみると、新たな発見があり、支援策も広がる。

これは親子の間でも起こりうる。自分の子どもを決めつける母親、自分の親を決めつける子、決めつけてしまうと関係がぎくしゃくし、親子の間に亀裂が入ったり大きな壁が出来たりする。

そんな時にこの諺を伝えながら、「本当にそうだろうか？」「なぜ〇〇だと思うのか？」「どうして△△ではないのか？」と聞いてみる。すると親も子も、何かに気づく。そしてそれが親子関係や他人との関係の改善に役立つことが多い。「先入観」もよいが元の言葉であるこの「先入主」の方がなじみがないからこそ入りやすいように思う。

<善の裏は悪>

良いことのあったあとには悪いことが巡ってくる。また、善悪は全くの別物ではなく、善を裏返せば悪となり、悪を裏返せば善となるということ。

良い悪いは単純に判断するものではない。講話などで、良くリフレーミングの話をすることがあるが、良い面と悪い面は表裏一体である。性格も出来事も、良い面から見れば良いが、悪い面から見れば悪くなってしまふ。良いことがあったと喜ぶのは良いが、必ず悪いこともあるのが世の中。良いことばかりは続きはしない。

例えば性格を考えた時に、決断が早くて、行動が早い人がいたとすると、良い人だが、反面その人は、おっちょこちょいだったり、短気だったりするのである。

褒められて調子に乗らないように、あるいは良いことがあって有頂天にならないようにという、なんだか寂しいが、調子に乗りやすい子にはこんな言葉をかけることもある。

<善は急げ>

良いと思ったことはためらわずに実行に移せという教え。「善は急げ、悪は延べよ」と続けても言う。「思い立ったが吉日」「旨いものは宵に食え」も同義語。

物事にはタイミングというのがある。どうしようかと迷っている間にタイミングを逸した経験のある人は少なくないだろう。特に、あれこれと悩んで、行動に中々移せない子どもや親に、この諺を伝えている。

今その人、その子がやりたいと思ったことが、良いと思われるなら、迷わず行動を起こすべきで、何もしなければ何も変わらない。行動あるのみである。ただしがむしやりに動けばよいというわけでもないので、

本人が良いと思っているか、望んでいる行動か、そしてその結果がそう悪いことにはならないだろうということをしっかり確認することは必要である。いたずらに煽ってはいけない。闇雲に行動を起こして失敗させてしまうのはなお悪いから、そこは要注意である。

英語では・・・

It is good to make hay while the sun shines. (太陽が照っているうちに干し草を作るのが良い)

<千里の行も足下より始まる>

どんな大きな事業も、手近なところから始まり、着実に努力を重ねていけば必ず成功するという教え。千里もの遠い旅も、足の第一歩から始まるという意から。

出典 老子

子どもの頃「千里の道も一歩から」と教えられていたが、実はこちらが由来である。子育ての中では、毎日毎日、同じことを子どもに言い聞かせていると感じる時期がある。障害を持って生まれたお子さんの場合など、特に、日々の変化が中々起こらないので、親の努力が延々必要に感じてしまう。そんな時にこの諺か「千里の道も一歩から」のどちらかを伝えて、必ず成長するし、変化もするからと伝える。実際変化していても、日々見ているとその変化に気づかないだろうが、半年前、1年前など、長いスパンで見てもらうと、変化に気づくことも多い。根気のいる仕事だが、子育てとはそういうものでもある。

また、受験勉強中の子どもや、資格テストを控えた子どもなどにも同様に伝えている。丁寧に一つずつやっっていこうと。時間がない時は仕方がないが、時間があるときは、一つ一つを丁寧にやることが大事である。最近面倒くさがり屋さんも増えているので、コツコツとやる事の大切さを伝えていきたいものだ。

<善を責むるは朋友の道なり>

互いに善を行うようにすすめ合うのは、友として当然なすべき道である。

出典 孟子

友達関係は、不登校の大きな原因になっている。少し前から表面的な付き合いだけで、もめ事が起きないように気を使っている子が多くなっている。いじめられたくないのもあるだろうし、目立ちたくないのもあるだろう。そして「私達って親友よねえ」などと言っている。

いじめの問題は大きな問題であるが、無くなるとも思えない。どんなに頑張っても対応をしても、世の中からいじめをなくすのは難しいだろう。大人の世界にもあるし、そもそもいじめのない世界というモデルがないのだ。

いじめがなくなるためには、子どもたちが、悪いことをしている子に「やめろよ」と言えることが重要である。しかし自分に火の粉がかからないようにと黙ってみてみぬふりをするか、最悪一緒になっていじめをしてしまう。

友達は、自分を正しいほうに導いてくれる存在である。悪いほうに引っ張るのは友

達ではない。

ちょっとした問題行動を起こした子どもとの面談で、子どもに良く友達のことを聴く。一人でも、その子のことを思って、「やめた方が良い」と言ってくれた子はいなかったかと。一人でもそういう子がいれば、子どもは間違いを犯さずに済むのである。友達とは、そういうものであってほしい。そんな願いからこの諺を挙げた。

出典説明

三国志・六十五巻

中国第四番目の正史。西晋の陳寿の撰。「魏志」「蜀志」「呉志」からなり、魏・蜀・呉の三国時代の歴史を記述した史書。魏を正統としており、その点で後世非難されたが、歴史書としては、史実を客観的に扱い、三国のどの王朝にも偏らずに三国時代をまとめている。「魏志」の中にある「倭人伝」は、日本に関する最古の文献として知られる。魏志三十巻、蜀志十五巻、呉志二十巻。

荀子・・・全二十巻三十二編

中国、戦国時代の思想書。趙の思想家荀況ちよう じゆん きやう けい

(荀子は尊称)の著。孟子の性善説に対して性悪説を唱え、人間の性は本来悪であるから、礼によってこれを改め、善に導いて、社会秩序を維持すべきだと主張した。

漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。『史記』に次いで二番目に成立した正史で、高祖から平帝までの前漢231年間の史実を記した歴史書。後漢の班固が父班彪の着手した修史を引き継いで完成し、班固の死後、妹の班昭が表十巻と「天文志」を補った。『史記』が上古から漢代までの通史であるのに対し、『漢書』は前漢一代だけの断代史であり、以降の正史の典型となった。

老子・・・

春秋戦国時代の思想家。道家の祖。姓は李、名は耳、字は聃（一説には伯陽）。老子は尊称。周の図書室の書記官だったが、周末の乱世を逃れて西方の関所を通った時、役人に頼まれて『老子道德経（老子）』二巻を著したという。

孟子・・・七編

中国、戦国時代中期の思想書。孟子の原稿を門人が編纂したもので、「大学」「論語」「中庸」とともに四書の一つ。性善説に基づく道徳論を説き、霸道（武力による政治）を否定して王道（仁徳による政治）を提唱している。